

日本ラテンアメリカ学会 会 報

№. 37

1991年4月20日

第37号 目 次

1. 会員活動報告
 2. 学術・文化情報
 3. 書 評
 4. 近着会員業績
 5. 事務局から
- 海外ラテンアメリカ研究センター紹介

1. 会員活動報告

○西日本部会研究会

1. 「侵攻後のパナマ：過渡期における
政治的・経済的パースペクティブ」

Sharlotte Elton

3月2日に南山大学において、アジア経済研究所に客員研究員として来日中のシャーロット・エルトン女史（パナマ社会行動研究センター研究員）を招いて、侵攻以後のパナマの実状について説明して貰った。エルトン女史は、スライドを使って、侵攻の生々しい傷痕を紹介しながら、今回の侵攻がパナマの政治的社会的基盤に深刻な影響を与え、侵攻後のアフターケアがまだほとんどなされていないことを指摘していた。とくに、今回の米国の強引な干渉はパナマ国民の間に癒しがたい無力感を植え付け、対米関係においては1903年当時に逆戻りした感さあるとのことであった。女史の報告のあと質疑応答に移り、パナマへの侵攻は、世界の関心がルーマニア問題に注がれている時を狙って行われたのではないか、また、直前のマルタ会談における米ソ間の和解が西半球で米国がよりアグレシヴな態度を採ることを可能にしたのではないかといった国際関係がらみの質問が出されたが、

女史はパナマ問題は米国にとって国内問題であり、侵攻の国際的契機を重視すべきではないことを強調していた。こうしたやりとりを通してパナマ問題を内から見た場合と外から見た場合の観点の相異が浮き彫りにされ、改めて地域を研究することの面白さと同時に難しさを感じた次第である。出席者は12名。なお今回の部会は南山大学ラテンアメリカ研究センターとの共催で実施された。

(松下 洋)

2. 「ユカテク・マヤの口頭伝承について
—森の精アルシュー—

桜井三枝子（関西外国語大学）

3. 「都市におけるカトリシズム
—クスコの事例より—

加藤隆浩（関西外国語大学）

3月16日（土）午後2時より京都外国語大学において開催され、上記の研究報告がなされた。

2報告とも人類学の立場から地域の伝承や祭りに題材をとり、テーマを絞った興味深い報告であった。

桜井報告では、伝説上の森の精アルシューが村々の生活のなかで悪戯をしたり好運をもたらしたりする伝承を紹介しながら、その社会的な機能を外界と共同体、聖と俗という2つの世界を仲介する存在として考えられるという分析視角を示した。

加藤報告では、クスコの大きな祭りの1つクルス・ベラクイの祭りが、近年盛んになってきた点に注目してその理由を文献や聞きとり調査に基づいて明らかにしようとするものである。報告ではクスコの都市化により本来

農村の祭りであったものが、都市にもち込まれ、その意味合いも変化してきたとする。都市化を意識の面から考えるうえで興味深いテーマである。 (辻 豊)

以下は各報告要旨である。

1) 「ユカテク・マヤの口頭伝承について —森の精アルシュー—」

ユカテク・マヤの祝祭と反乱に関する二回の民族学的調査を、シュカカル宗教センターとその連盟村において行なった(1988年、1990年)際に、水の精シュタバイとともに、森の精アルシューがよく伝承されていることに注目させられた。『京都民俗』8号でその事例数件を紹介したが、当発表においてそれらの分析検討を試みた。アルシューは小人であり、森の精であり、遺跡に棲み、人間に食欲なまでに儀礼を要求し、見返りとして、富と健康と幸運をもたらすが、一度儀礼を怠ると苛酷なまでに災害をもたらす。アルシューの誕生と死はシャーマンであるフー・メンと深く関わっている。自然と文化の仲介者とも解されるが、前スペイン時代より現代にまで広く継承されてきた「物言う聖像」儀礼との関連も考えられる。今後、太陽、月、水の精、森の精などにより構成されるマヤの宇宙観に着目しつつ、アルシューについての資料をさらに地域的に広く収集し比較検討をするつもりである。

(桜井三枝子)

2) 「都市におけるカトリシズム —クスコの事例より—」

1990年7月より3カ月間、平成2年度文部省科学研究費海外学術調査補助金(代表:友枝啓泰国立民族学博物館教授)により、ペルーのクスコ市の都市人類学的調査を試みた。以下の分析は、そこで得られた資料の一部をもとにしている。クスコ市では、5月3日にクルス・ベラクイ(聖十字架の祝日)の祭典が行われ、その町の観光の一つの目玉となるほど、エキゾチックで大規模なものとなっ

ている。しかしながら、この祭典は、今から40年ほど前には、クスコではほとんど見るべきものがないほど細々と執り行われているに過ぎなかった。それが、短期間に興隆した背景には、1950年にクスコを襲った地震、農村の危機、さらには、農業改革等の影響で加速的に増加した、地方からクスコ市への移住がある。移住者は、農村の文化を担い都市に移住してくるので、そこには必然的に農村文化の数々の要素が姿を現すことになる。農村部からの移住者が、クスコに次々に建立した十字架もその一要素であるが、それは、農村部では、もともと、農耕・生活の安寧を祈願するものであった。しかし、都市での地方出身者は、もはや、農民ではありえず、また、十字架が立つその場所も農地ではない。そこで、十字架の持つ意味が変容し始める。クルス・ベラクイの祭典そのものも、農村文化的特徴(たとえば、農民の生活を表象するようなダンス)を喪失しはじめ、十字架は、都市の住民の多様な祈り(経済的成功、恋愛成就等)を受けとめるようになる。十字架は、このように農村部の文化的コンテクストから切りとられ、都市に移植・定着する過程で、都市という環境にその信仰を適合させてきた。クルス・ベラクイの変貌は、まさに、十字架の都市への適応のプロセスに他ならないのである。(加藤隆浩)

2. 学術・文化情報

○チリ大学夏季国際学校公開講座「新世界： ユートピアと現実の500年」

吉田秀穂(アジア経済研究所)

さる1月7日から18日までの10日間、チリ大学主催の公開講座がアンドレス・ベージョ・キャンパスで開かれた。1992年の新世界発見500年を睨んでのものである。

講座は、Jaime Lavados チリ大学学長の開講の辞、そして国際学校校長で歴史学者の Rolando Mellafe 教授(『ラテンアメリカと

奴隷制」、岩波書店、の著者)の記念講演

(『Invencción de América』)で始まった。この中で教授はラテンアメリカにおけるアイデンティティの未確立について話した。この後、講座は19のコース(各コース:4-8コマ)に分かれて行われた。

コース名だけを示すと、「16世紀:2つの世界の接触と拒絶(Siglo XVI: Encuentro y Desencuentro de Dos Mundos)」、「アンデスにおける文化変容と抵抗」、「スペイン映画:ルイス・ブニュエル特集」、「イベロアメリカにおける混血とアイデンティティ」、「21世紀をまじかにしたラテンアメリカ音楽」、「ラテンアメリカのイデオロギーと政治発展」、「芸術と文化の混合:プレコロンビア芸術から現代芸術へ」、「イベロアメリカにおける巨大な信仰システム」、「文化的アイデンティティの表現としての映画」、「思考様式の歴史のメカニズムと到達点」、「現代ラテンアメリカ文学」、「ヨーロッパの旧新政治秩序とそのラテンアメリカへの投影」、「言語とコミュニケーション:近代におけるスペイン語と原住民の諸言語」、「文学におけるラテンアメリカの隠匿と発見」、「ラテンアメリカの教育におけるスペインの思考と文化の諸基礎」、「ラテンアメリカ経済の形成:現状と将来」、「ラテンアメリカへの諸社会科学からの視点:近代化のダイナミックス」、「19世紀および20世紀のチリおよびイスマノアメリカ演劇におけるスペインのイメージ」、「ラテンアメリカの建築とその根源」である。

講師陣は、チリ大学の諸教授を中心に約60名、スペイン、ペルー、米国から招請された教授数名であった。

またこれらと平行してスペインやラテンアメリカの映画(La Misión, La Ciudad y Los Perros, Charla Miguel Littin, Camila, La Colmena, Carmen など28点)、コンサート、チリの先住民であるマプーチェの人たちの芸術展、などの催しもあった。

筆者が覗いたのは、午前の「16世紀:2つの世界の接触と拒絶」、午後の「アンデスにおける文化変容と抵抗」の2つの講座で、聴講者には老人から若い人まで大勢居て、盛況であった。聴講したものの中では、スペインによる征服と植民地化の経緯を扱った Sergio Villalobos教授と、Franklin Pease教授の話が非常に面白かった。

記憶している限りのことを少しだけ記すと、アロンソ・デ・エルシージャの叙事詩 La Araucana、ペドロ・デ・バルディビアの書簡なども引用しての Sergio Villalobos教授による話、すなわち新世界発見とそれに続く征服・植民地化の過程を理解するには、一筋縄ではいかなくて、当時のスペインの国土回復戦争直後を考慮に入れる必要があること、征服者の出身は、アングロノール、カスティージャ、エストゥレマドゥーラ地方が多く、年齢も非常に若くて、基本的に若年層による事業であったこと、女性が占めた比率は約20%、ヨーロッパ人として未知の世界に初めて足を踏み入れ、それを歴史に残したいという個人的欲求など、初めて聞く話であった。

Franklin Pease教授によるピサロロなどによるタワンティンスユ(『インカ帝国』)征服の経緯の話は、これまで流布されてきたものは殆どが眉唾ものということから始まり、比較神話学、比較伝承学の成果をまじえての、1532年の少人数による征服話は先住民の協力がなければ不可能であったのではないかと、当初の記述にはアタワルパだけであったのが、1840年代以後になって初めて、クロニスタ達によるインカ、ワスカルの名、そして詳しいインカの皇統史、が出現するなどの話、皇統史の内容のおかしさの話は、謎解きの趣があって、500年を経た現在もいまだ解決されていない諸問題が相当あることに、聞いていてため息が出た。

海外ラテンアメリカ研究センター紹介 (9)

トルクアート・ディ・テーリャ

(Instituto Torcuato Di Tella) 研究所

ラテンアメリカのなかでアルゼンチンは、第二次世界大戦以前より教育水準の良好なことで知られていたし、またそれがアルゼンチン国民の誇りでもあった。国民の識字率は高く、ブエノスアイレス大学を初めとする一連の大学が存在し、さらに自然科学及び社会科学両面にわたる研究水準も決して低くなく、ノーベル賞受賞者も数人輩出している。しかし、1970年代以降の経済停滞・危機は教育研究両面にわたって甚大なる負の影響を及ぼした。特に公的教育研究部門の頹廃は著しく、大きな社会問題となっている。1990年の秋にはそれを象徴する事件がブエノスアイレス大学で起きた。それは公共料金の不払いによりブエノスアイレス大学が水道の供給を市から一時ストップされたという一見些細な事件であった。しかし、その時明らかになった大学の財務状況によると、予算の90%が人件費で消えてしまい、残りの10%でそうした公共料金を支払わなければならないし、さらにそこから研究費や奨学金の支払いもしなければならないという状況であった。また予算の90%が人件費に費やされているとはいえ、ほとんどの大学教員は日本でいう非常勤講師であり、その受け取る給与は極めて低く、日常は民間企業や官庁等で勤務して週に一度大学で講義を行うと言うのが実状である。

そのような訳で、現在のアルゼンチンでは、大学で組織的に研究を続行するには問題が山積している状況にある。そこでフルタイムで研究を続けたい研究者は、いきおい民間の研究所に籍を置かざるを得なくなっている。こうした状況を現地の研究者は自嘲的に「研究の民営化」と呼んでいる。ここで紹介するトルクアート・ディ・テーリャ研究所（以下ディ・テーリャ研究所）もそんな民間の研究所の一つであるが、そ

の歴史も長く、しかも研究教育活動も活発で、社会科学の分野において権威ある研究機関のひとつとして社会的評価が定着している。

ディ・テーリャ研究所は、1958年にアルゼンチン有数の民族系企業グループであるシラム・ディ・テーリャ・グループの所有者一族であるディ・テーリャ家とその創業者であるトルクアート・ディ・テーリャ

(1892~1948)を記念して創設した研究・高等教育機関である。(シラム・ディ・テーリャ・グループについては今井圭子「アルゼンチン—工業化と内資企業集団、シラム・ディ・テーリャ」、米川伸一・小池賢治編『発展途上国の企業経営』、アジア経済研究所 1986年参照)

現在同研究所は研究部門として経済研究センターと社会研究センターをもっていて、経済史を含む経済学のほぼ全領域から政治学、社会学に至るいわゆる社会科学の幅広い部門にわたって研究活動が行われている。研究者の資質は高く(多くの研究者は欧米の大学の学位保持者である)、そこで行われている研究はアルゼンチンでも最高水準であるとの評価が定着している。こうした高い研究水準を背景として欧米やラテンアメリカ諸国の著名な大学研究機関との交流も活発である。研究者は各々の研究室を持ち、その待遇は日本の大学のフルタイム・プロフェッサーに近く、ここにいる研究者はアルゼンチンでは最も恵まれた部類に属する。研究の成果は基本的に同研究所の出版部から出版される。研究部門と密接に関係する図書館について述べると、同研究所の図書館は社会科学部門に限っていえばアルゼンチンで一番充実しているもののひとつであるといつてよい。その蔵書は約6万冊でコピーサービスもあり、また一般開放

されているため外部の利用者も多い。

教育部門としては大学院課程を設けている。主なコースとしては経済学研究コース、歴史学研究コース、政治学研究コースなどがある。日本やアメリカと学制が異なるため単純な比較は出来ないが、アルゼンチンの国立・私立大学ともその大学院課程での教育研究指導には未整備な点が多々みられる。そのためアルゼンチンでは大学院レベルでの教育を受けようとする場合、アメリカかヨーロッパの大学に留学する学生が多く、またラテンアメリカ域内ではメキシコ

のコレヒオ・デ・メヒコなどに留学する場合もある。しかしディ・テーリャ研究所の場合、教員が同研究所の研究員で質が高く、教育カリキュラムが充実していることのほか、学生にもフル・タイムでの取組を求めるなど大学院水準でもアルゼンチンのトップレベルにあるといえる。

住所： Instituto Torcuato Di Tella, 11
de Septiembre 2139, (1428) Capital
Federal Argentina TEL 781-5013/15,
784-8264/8225 (宇佐見耕一)

3. 書評 藤田富士男『ビバ！エル・テアトロ！炎の演出家 佐野 碩の生涯』オリジン出版センター、1989年、250ページ。

評者：高山 智博（上智大学）

佐野碩の波乱の生涯を扱った本書は、彼の名を知る者にとって、まさに待望の書であると言ってよい。我々ラテンアメリカ研究者には、セキ・サノはその人生の半分を過ごしたメキシコで、その国の演劇の近代化に不滅の足跡を残した人物としての印象が強い。しかし芝居好きな彼が、東京帝大生として、創設期の左翼演劇運動において千田是也らと活躍した時代、あるいは共産党シンパとして、日本を追われ、米国、ドイツ、ソ連などへと移り住んだ時代も興味深い。ソ連ではメイエルホリドのもとで演劇修業をしたが、スターリンの粛正にあって国外追放された。だが、佐野についての調査は資料が散逸していたり、様々な外国語にわたるため、これまで何人かが挑戦したが、どれも部分的な研究であったり、簡単な紹介で終わっている。したがって、彼の全体像を描こうと努力した筆者の情熱に、

まずは拍手を送りたい。

本書は日本篇と外国篇の二章から成っている。第一章の日本時代については詳しく調べてあるので、ある程度満足できる内容といえる。佐野は大正の終りから昭和の初めにかけての変動期に、演劇や左翼運動で活躍した学生の一人であった。出来れば、その時代背景をよりマクロな視点から展望し、そうした中でのライフ・ヒストリーとして、佐野の行動を位置づければ、さらに学問的意義も高まったであろう。

ソ連時代に佐野と運命を共にした人物に築地小劇場の土方与志がいる。土方は伯爵家の三代目だったが、佐野も母が伯爵の後藤新平の娘である。また同世代の石田英一郎も男爵家の出であった。石田は家族から、芝居をやりはじめた与志について「土方のノラ息子」といった話を聞いて育った。他方、石田も治

安維持法の違反第一号となり、「石田のドラ息子」呼ばわりされた。佐野も周りの者から芝居をやる道楽者と見られていたのである。私は個人的に、彼らがお坊っちゃん育ちながら、文化や芸術の分野から、「民衆の中へ」と入っていった現象の比較研究も面白いのではないかと思っている。

ところで、私をはじめ佐野の名を知ったのは、1958年、文化人類学者の石田英一郎を団長とする第一回東京大学アンデス地帯学術調査団に、読売新聞の特派員として同行した作家の林房雄が、途中立ち寄ったメキシコで、東京帝大時代の旧友佐野と二十五年ぶりに再会した記事によってであった。1961年元旦、「日本語をしゃべらず、日本人には会わぬという伝説」の持主である彼に会って見たいと思ひ、メキシコ市にある日墨会館で行われた新年会に出た時、私は二、三日の日系人に佐野のことを尋ねた。答えは案の定、「彼は日本人に会いたがらない」というもので、諦めたことを覚えている。しかし佐野は別に日系人や日本人を毛嫌いしていたわけでも、日本語を忘れたわけでもなかったらしい。戦時中、スパイ扱いされるのがいやで、日系人には近づかなかっただけなのである。戦前のメキシコは、スペイン内乱を逃れてきた共和派のスペイン人、あるいはスターリンに追われてい

たソ連のトロツキーなど、数多くの亡命者を受け入れたが、佐野は1939年に入国した、唯一の日本人亡命者であった。

佐野はスタニスラフスキーの演劇理論の紹介者および一流の演出家として、また五千人以上の弟子を養成した演劇学校のマエストロとして、この国に貢献した。だが、彼が愛したメキシコにあって、その半生は孤独だったのではなからうか。それは1932年に日本を出てから1966年に死去するまで、一度も祖国の土を踏むことがなかったからである。

佐野の外国時代は本書の第二部でも、十分に明らかにされていない。例えば、彼のメキシコでの業績を正當に評価するには、本人の足跡を追うだけでは無理であろう。どうしてもメキシコ近代演劇史の全体を把握する必要がある。またスペイン語の知識が十分でなければ、一次資料の発掘も、それを読むことも難しかろう。さらに彼は演劇指導のため、キューバやコロンビアにも出掛けているが、その方の研究も手つかずである。ソ連での彼の行動については、情報公開により、今後、より正確な研究が可能になるかもしれない。

ともかく、本書の出版によって、佐野とその時代がかなり展望しうる状態になったのは前進といえるのである。これからは各分野の専門家による緻密な研究が必要であろう。

書評 高橋正明（文）・小松健一（写真）『チリ・嵐にざわめく民衆の木よ』大月書店、1990年、189ページ。

評者：吉田 秀穂（アジア経済研究所）

チリでは1973年のクーデターでアジェンデ社会主義政権が打倒され、ピノチェー軍事政権が成立し、共産党・社会党などの左派勢力は大弾圧を受け続けた。そして1988年の国民

投票でのピノチェー將軍の敗北の結果、軍政当局と民主化勢力の話し合いで不十分ながら「1980年憲法」の修正がなされ、1989年12月の総選挙（大統領・議会議員選挙）で民主化

勢力が勝利、1990年3月にエイルウィン現政権（実質的にキリスト教民主党と社会党の連立政権）が成立した。新政権は、民主主義の再建と国民和解のための諸政策（1980年修正憲法の修正、人権侵害の究明、文民統制の確立、司法改革など）の実施をめざしている。というのは、民政化以後のチリは、制限された民主主義の状態にあるからである。また政権成立直後から軍部によるクーデタ以来の人権侵害の数々が続々と明るみに出され、新政権と軍部とは現在厳しい緊張関係にある。

民主化運動が勝利したのは、政治的に敵対していた中産層のキリスト教民主党と（社会民主主義に変身した）社会党が連合し、1983年以後の反軍政民主化運動を1987年半ば以降にそれまでの「対決型」から「交渉型」へと転換し、右派の一部も取り込み得たためであった。共産党などの最左派は「対決型」に固執して孤立、大統領選挙ではエイルウィン支持を余儀なくされ、議会議員選挙でも総敗北を喫し、1989年以後のヨーロッパでの冷戦体制終結の余波で、イデオロギー的にも組織的にも危機に直面しているのが現状である。

本書は、1989年の総選挙前後のチリに取材し、この軍政から民政への転換の様子を、主としてこれまで日本では紹介されることの無かった貧困層を中心とする（かつては人民とよばれていた）「民衆」、特に「共産党系」と思われる「民衆」の側から生き生きと伝えるとともに、ポブラシオンと呼ばれる貧困層居住地域での、その生活、運動、弾圧、抵抗などの様子を歴史的・多角的に解り易く描き出し、更にチリのほぼ全土を訪ねて、チリのさまざまな「民衆」の運動の歴史、現状、問題を素描し、「民衆」の声をとおして軍政期からの経済開発による変化、実態、環境破壊、そして日本との経済的関係の一端にまで触れた、ルポルタージュである。

写真も良く、豊富で、読み易い文章とともに、チリの国土・風景や選挙の様子、生活感

のある「民衆」の雰囲気良く伝わり、参考になる諸点が多々あって、学術書ではないこの種のルポルタージュが示しうる説得力・迫力といったものが感じられる労作である。

評者には、個人的には、特に「共産党系」の「民衆」の現状、すなわち苛酷な弾圧に抗して、市民社会のレベルで軍政の終結に一定の役割を果たして来、民政化は実現されたものの、社会主義の理念は崩れかけ、制限選挙に起因する共産党の総敗北で、政治社会から取り残されたかにさえ見える「民衆」の「とまどい」と取れる部分に、ある種の感慨を覚えた。本書の表題が「嵐にざわめく民衆の木」とされているのは、こうしたチリ「民衆」の苛酷な歴史と、「民衆」にアジェンデ政権成立時と異なって、沸き立つような希望が無い不満足な現状を考慮してのことであろう。

強いて難点をあげれば、本書はチリ社会の一部分を紹介したものであるため、その全体像が不鮮明になっていることである。それは本書が上流階級・中産層を除外し、「民衆」の側に余りにも焦点を当て過ぎ、密着したため、たとえば富と貧困の巨大な格差という社会的矛盾とその中で「民衆」の位置が分かりにくくなっており、写真もこれに引きずられて「民衆」一辺倒になっていて、我々がチリで普通に目にする風景や人びとは印象がかなり偏ったものになっていることが惜しまれる。これが入っていたら本書はもっと鮮烈なものになっていたであろう。またほんの一例だけあげれば、民政化はしたが、軍部は兵舎に戻ったわけではなく、ピノチェー将軍が陸軍司令官として1997年まで在任することなど、依然として強大な政治勢力として制度的に厳存していることは指摘すべきであったろうし、新政権の綱領の内容や銃火で政権を追われながら振り返きを果たした社会党の紹介が無いのでは、せっかく取材でチリまで訪ねながらどうしてか、という印象が残った。

4. 近着会員業績

〔抜〕青木芳夫「C. L. R. ジェームズのハイチ革命論」(『ラテンアメリカ論集』46.24、1990年、ラテンアメリカ政経学会)

〔抜〕青木芳夫訳「真昼に日が暮れて(エクアドルの民話3)」(ラテンアメリカ資料センター、『資料ラテンアメリカ』特集シリーズ8、1991年1月15日)

〔抜〕角川雅樹「火山噴火による災害と精神保健「被災地のPrimary Health Care Workerにより発見される精神的問題について：アルメロ(コロンビア)の経験から」(『精神医学』第33巻第1号、1991年1月15日)

〔抜〕同上「サン・マルタン」(東海大学留学生センター『人間の場から』第22号、1991年2月10日)

〔冊〕岸大介“Aproximación sociolingüística a los expresiones: ME CAES BIEN, ME GUSTAS y TE QUIERO en el habla culta de Guadalajara, México”(八千代国際大学紀要『国際研究論文』第3巻第2号、1990年7月)

5. 事務局から

i) 新入会員(第49回理事会承認)

iii) お願い

会員名簿作成の為の原稿を提出されていない方は、至急事務局迄、ご返送下さい。

尚、以下の方々の住所が不明となっております。お心当りの方は事務局迄ご一報下さい。

今井洋子、小池康弘、中野達司、西川潤、松下日奈子、持永秀樹、吉井みづき、サンミゲル・イネス、西川純子、柳沼孝一郎、稲村哲也、浦部浩之、梅村芳樹

編集後記

兎にも角にも湾岸戦争は終結した。世界は我に帰ったが、そこには依然として多くの困難な問題が未解決のまま残されている。いや、戦争のコストは、それらの問題の解決を延引し、一層深刻化したともいえる。ラテンアメリカにとってもそれは例外ではない。日本に期待される役割は大きい。4月7日からはIDB名古屋総会が開催され、日本に対してさまざまな協力が要請されている。地道な人的交流こそその基盤となるものと思われる。

(小坂允雄)

No. 37

1991年4月20日発行

〒305 茨城県つくば市天王台1-1-1

筑波大学社会学系細野昭雄研究室内

日本ラテンアメリカ学会事務局

☎0298-53-5067